

私がなぜ現在の科目を選んだか

「理学療法学」

信州大学医学部保健学科理学療法学専攻

小 宅 一 彰

「私もリハビリのお世話になった元患者なんですよ」診療の中で、患者さんから理学療法士になった理由を尋ねられた時の私の答えです。

中学1年の5月11日、部活動の試合の帰りに、高齢者の自動車暴走事故に巻き込まれました。右大腿骨に重度な骨折を負い、整復のために1か月以上の長期臥床を余儀なくされました。今では考えられないことですが、当時はベッドサイドでのリハビリテーションが行われず、完全な寝たきり生活でした。骨折箇所を固定する手術が行われ、主治医からベッドから起きることを許可されましたが、1か月以上寝たきりだった人間がそう簡単には動きません。深刻な廃用状態に陥っており、起立性低血圧、関節拘縮、筋力低下のために、座っていることすらままなりません。車いすに乗って泣きながらリハビリテーションに向かった私を

私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器外科」

信州大学医学部外科学教室

呼吸器外科学分野

中 村 大 輔

私が幼少期や学生時代に漠然と抱いていた理想の医師像には、必ず「手術」をしているシーンがあり、なんとなくその理想の医師像に引っ張られて外科医を目指すようになったことが最初は大きかったと思います。かと言って手術を行う診療科は数多くあります。事実、学生時代には整形外科を志していましたし、将来の診療科決定において、その他の手術を扱う診療科と、初期研修医時代に大いに悩んだのを覚えています。

その中でも「呼吸器外科」を選んだのは、こう言うのは元も子もありませんが、個人的な好みだと思います。学生時代の実習や初期研修医の頃に多くの診療科に触れる機会がありましたが、単純に呼吸器外科の仕事内容や手術が魅力的に感じられました。特に、「肺

笑顔で迎えてくれたのが、理学療法士と作業療法士でした。車いすの自走練習に始まり、上肢と左下肢の筋力トレーニング、固まってしまった右下肢のストレッチ、移乗練習、起立練習、歩行練習と体の回復に合わせて段階的にリハビリテーションプログラムを進めていただき、中学1年の10月には復学することができました。初めて歩けたときは涙が出るほど感動し、生活を取り戻すリハビリテーションの仕事に感銘を受けました。このような自分の経験を活かした社会貢献をしたいと考え、理学療法士を目指しました。

大学院修士課程を修了後、理学療法士として回復期リハビリテーション病院に勤務しました。この病院での臨床教育ならびに臨床経験から、運動や練習による身体活動量をいかにして高めるかが、リハビリテーションの効果を引き出す重要な課題であることを認識しました。そこで現在は、身体活動の基盤となる循環機能や動機づけに関する研究に取り組んでいます。理学療法士の研究者として、重症化予防・介護予防の課題解決に貢献したいと思います。

(信大大学院博士後期課程平29年卒)

という重要臓器を手術で切除する」というシンプルかつ呼吸器外科医にとって最大の武器であるポイントが、他の診療科にはない大きな魅力として映り、これが自分にとって最も面白いと思えたことが決定打となり、2年目の秋に呼吸器外科に進む決心を固めました。

肺癌は、部位別がん死亡数1位の悪性度の高い疾患です。これまで原発性肺癌に対して数十年変わることのなかった標準術式がここ数年で変化したり、免疫チェックポイント阻害剤といった新たな治療薬が登場するなど、今、肺癌診療は、大きな変革期を迎えています。こうした厳しい予後の疾患に対して、外科医として手術を行い、患者さんが術後に元気に退院される姿を見る瞬間は、外科医として何よりの達成感を感じる場面です。その瞬間にこそ、呼吸器外科医を選んで良かったと実感します。まだまだ未熟な身分ではありますが、これからも患者さんのために力を尽くし、呼吸器外科医として少しでも役立てるよう、日々研鑽を積んでいきたいと思っています。

(秋田大平24年卒)